

高2 難関大国語



1章

【問題】（演習）

出典：飯沢耕太郎『写真とことば』／オリジナル問題

文章略解

「解答例」に同じ。

解答

記号としてのことばと写真の働き方は異なる。ことばは、実物を断片的かつ継起的にしか伝達できない点で、具体的に直ちに全体を把握させる写真に劣る。しかし写真では抽象概念の伝達が難しい。写真評論家は写真をことばに翻訳し、写真家は写真をことばのように使いこなす試みを発展させた。しかしこれらは表現の幅を狭めるのではないか。両者を合わせ鏡のように照応させる試みに、より豊かなふくらみをもつ表現世界が期待される。〔199字・解答例〕

【問題】(自習)

出典…小林秀雄『自由』(角川文庫『常識について』所収) / オリジナル問題

文章略解

問2の解答例に同じ。

解答

問1 リバティー＝市民の権利として与えられた、社会的実的な自由

フリーダム＝自己実現に関わる、全く個人的な態度としての自由

問2 英国人は、自由を言うのに、市民の権利として与えられた社会的実的なリバティーと、自己実現に関わる全く個人的な態度と

してフリーダムという二つの語を持っている。一方、日本には自由の一語しかないが、自由主義者になるには、一語しかない方が便利かもしれない。自由論者が求める自由は精神の自由を欠いた死骸にすぎないからだ。こうして扱われる実相の曖昧さも急速に

大きくなり、もっともらしい言辞だけが広がっていくのだ。〔199字・解答例〕

問1 「キーワード」とは、文章の読解のポイントとなる、筆者の主張にかかわる重要な言葉のこと。筆者の主張に端的につながる言葉を探せばよい。

この文章は「自由」をテーマにしている（文章のタイトルを見てもすぐわかる）。そして「自由」を表す言葉として、英国における「リバティー」「フリーダム」、フランス語の「リベルテ」が挙げられている。キーワードを「二つ」挙げ、意味を「比較せよ」という指示なので、英国の二語を挙げるべきだろう。

「リバティー」と「フリーダム」という二つの言葉は、日本語だとどちらも「自由」になるのだが、意味するところはまったく違う。設問に「それぞれの意味を比較せよ」とあるので、文中でそれぞれの言葉がどう説明されているかを見てみよう。

リバティー……「与えられている」「市民の権利」「社会的な実質的な自由」

フリーダム……「全く個人的な態度」「外部から与えられるというようなことはない」「自己を実現しようとする人は、必ず義務感と責任感とを伴うフリーダムを経験する」

これらの表現を用いて、両者を対比的に説明するとよい。

問2 「前問の作業を踏まえ」という条件付きの要約問題。問題文の論理展開に沿わせながら、筆者の主張を二百字以内でまとめる必要がある。要約問題では、「筆者のもっとも言いたいこと」を押さえるとともに、「言いたいこと」を述べるために筆者がどういう論理構成を取り、文章をどのように展開しているかまでを含めてまとめていく。まとめていくための手順は次の通り。

- (1) 全文を内容の観点からいくつかの大きなブロックに分ける。
- (2) 各ブロックの重要箇所をマークする。
- (3) マークされた重要箇所を通して読み、筆者の「言いたいこと」が何であるかをつかむ。
- (4) マークされた重要箇所の中で、筆者の「言いたいこと」を構成するのに欠かせないものだけを残す。

(5) 作業を経て残されたマーク箇所を、制限字数に合うようにつなぎ合わせる。

(6) 出来上がった要旨を読み直し、意味が通るかどうかが、論理展開が合っているかを確認する。

以下、この問題に即してルールを追っていこう。

(1) ブロック分け

この文章はイギリス人にとっての「自由（リバティーとフリーダム）」を述べた①②段落と、日本人にとっての「自由」を述べた③④⑤⑥段落とに区切ることができるので、大きく二つのブロックに分かれるといえる。

(2) 重要箇所マーク

各ブロックにおける重要箇所は次の通り。

第一ブロック — 「英国人は、自由を言うのに、リバティーという言葉とフリーダムという言葉と二つ持っている」(①段落)

「概念的に説明しにくいということは、言葉が生きて使われている証拠であり……英国人の自由に関する常識は、まことにうらやましいことだと思われたのである」(②段落)

第二ブロック — 「日本には自由という一語しかない」(③段落)

「自由主義者になるのには、自由という一語しかない方が余程便利かも知れない」(③段落)

「言論の自由を与えよ、というプラカードの下に……自分の苦心創作になる言論をだれも持っていないならば、自由の死骸を求めて、歩いている様なものだろう」(④段落)

「文化論の論題の単位は、日に日に大きなものになってゆく。それにつれて扱われる実相の曖昧さも急速に大きくなって行く」(⑤段落)

「曖昧さを糊塗する為に、論者は、いよいよ華々しい、もっともらしい言辞を必要としてくるだろう」(⑤段落)

(3) 筆者の「言いたいこと」を探し

筆者の「言いたいこと」は、英国の「自由論」についてではなく、日本における「自由」「文化」の在り方であるから、第二ブロックにあるとわかる。第二ブロックの中でも特に、日本における文化論の在り方について述べている④⑤段落のマーク箇所を必ず盛り込むこと。

(4) 欠かせないもの残し

ここで確認しておきたいのが、設問条件である「前問の作業を踏まえ」である。この文章のキーワードである「リバティー」と「フリーダム」の比較は、今回の要約に欠かせない要素である。そこで、第一ブロックでチェックした「英国人は、自由を言うのに、リバティーという言葉とフリーダムという言葉と二つ持っている」についても、まとめにあたって欠かせない表現であるところ。さらに、前問で確認した「リバティー」と「フリーダム」の違いについての説明も加えると、「前問の作業を踏まえ」たことになる。

次に、イギリス人にとつての「自由（リバティーとフリーダム）」との比較として、日本人にとつての「自由」を述べた第二ブロックの「日本には自由という一語しかない」、この要素も欠かせない。英国と日本の「自由」を端的に比較している表現だからだ。

最後に、筆者の「言いたいこと」である日本における「自由」の在り方についてまとめる。筆者は要するに「日本では「精神の自由」を理解しないまま「自由」が求められ、文化論が展開されている」ということが言いたいのである。よって、第二ブロックのマーク箇所の中から「自由主義者になるのには、自由という一語しかない方が余程便利かも知れない」「言論の自由を与えよ……自分の苦心創作になる言論をだれも持っていないければ、自由の死骸を求めて、歩いている様なものだろう」「文化論の論題の単位は、日に日に大きなものになってゆく。それにつれて扱われる実相の曖昧さも急速に大きくなって行く」を組み合わせて用いればよい。

(5) つなぎ合わせる

(4)の作業で残したマーク箇所（あるいはマーク箇所の主要な表現）をつないで答案を作ってみると、次のようになる。

(案)

英国人は、自由を言うのに、リバティーという言葉とフリーダムという言葉と二つ持っている。リバティーは市民の権利として与えられた、社会的・実的な自由のことであり、フリーダムは与えられるものではなく、自己実現にかかわる個人的な態度としての自由のことである。一方、日本には自由という一語しかないが、自由主義者になるには、自由という一語しかない方が余程便利かもしれない。自分の苦心創作になる言論を持たないまま自由を求めても、自由の死骸を求めて、歩いている様なものだからだ。こうして、文化論の論題の単位は、日に日に大きなものになっていく。それにつれて扱われる実相の曖昧さも急速に大きくなっていく。(二九三字)

設問条件の「二百字以内」に収めるよう、「リバティー」「フリーダム」の説明は「英国人は、自由を言うのに、リバティーという言葉とフリーダムという言葉と二つ持っている」の部分に修飾語として盛り込むことにする。さらに、日本における自由をめぐる文化論についての記述をまとめてすっきりさせるとよい。

(6)読み直して確認

(解答) ※傍線部分が字数調整のためにまとめ直した部分。

英国人は、自由を言うのに、市民の権利として与えられた社会的実的なリバティーと、自己実現に関わる個人的な態度としてフリーダムという二つの言葉を持っている。一方、日本には自由の一語しかないが、自由主義者になるには、一語しかない方が便利かもしれない。自由論者が求める自由は精神の自由を欠いた死骸に過ぎないからだ。こうして扱われる実相の曖昧さも急速に大きくなり、もつともらしい言辞だけが広がっていくのだ。(一九九字)

2章

【問題】（演習）

出典：立川昭二『臨死のまなざし』〈第八章 変わる死「つくられる『死』 脳死」〉「文化」としての死の全文／宇都宮大学 99年

文章略解

日本語に「胸」「腹」といった身体語の入った慣用句が多く見られることは、日本人が身体中心・心身相関の死生観を持っていることの現れである。医学生ですら潜在的には脳死を「死」と認めていないようであり、そういったメンタリテイが、死にまつわる言葉の微妙な使い分けにも現れている。人の生死に関わるメンタリテイは変わるのに最も時間のかかる領域であるから、脳死問題についても心底納得できるまで時間をかけて検討していく必要があるのではないか。

解答

- 問1 ①＝中枢 ②＝依然 ③＝夏目漱石 ④＝根源 ⑤＝納得

問2 日本語において、「心」の意を表すのに、「胸」や「腹」といった身体語の入った慣用句が多く用いられていること。〔53字・解答例〕

問3 精神と身体をはっきりと区別し、身体に対して精神を優位と考える西欧的人間観ではなく、心と体は相関関係にあり、生命は身体全体が司ると考える、身体中心の生き方をしていた。〔82字・解答例〕

問4 医学生たちの死体に対するイメージは「冷たい」「動かない」であり、これは、体温もあり脈も打っている脳死の状態と相容れないものだから。〔65字・解答例〕

問5 脳死（18行目ほか）

問6 人間の生死を脳という一個の臓器で判断する「脳死」は、日本人の心身相関の人間観とはなじまないものであり、筆者は慎重派の立場にたっている。同様に「臓器移植」についても、生命にまつわる人間のメンタリテイは変わっていくのに時間がかかるものであるがゆえ、短絡的・表層的でない慎重な対処が求められるとの見解だと類推される。〔155字・解答例〕

【問題】（自習）

出典：養老孟司『日本人の身体観の歴史』へⅡ 現代哲学の身体観、現代哲学の心身論の冒頭の一節／ 日本大学 97年

文章略解

脳の機能は、形のあるものを知覚する視覚と、形のないものを知覚する聴覚に代表され、その認識機構の違いが心身二元論を生じさせるのであって、人間という存在そのものに身体と心という二つの属性があるわけではない。従って、脳の機能を考慮しない心身論には重大な欠陥がある。外部世界の法則と脳の間には対応関係が存在し、それを証明するのが経験科学・実証科学である。一方、脳の内部世界だけで完結する論理体系を持つのが数学であり、それはアナロジーとしてのみ存在しうる。

解答

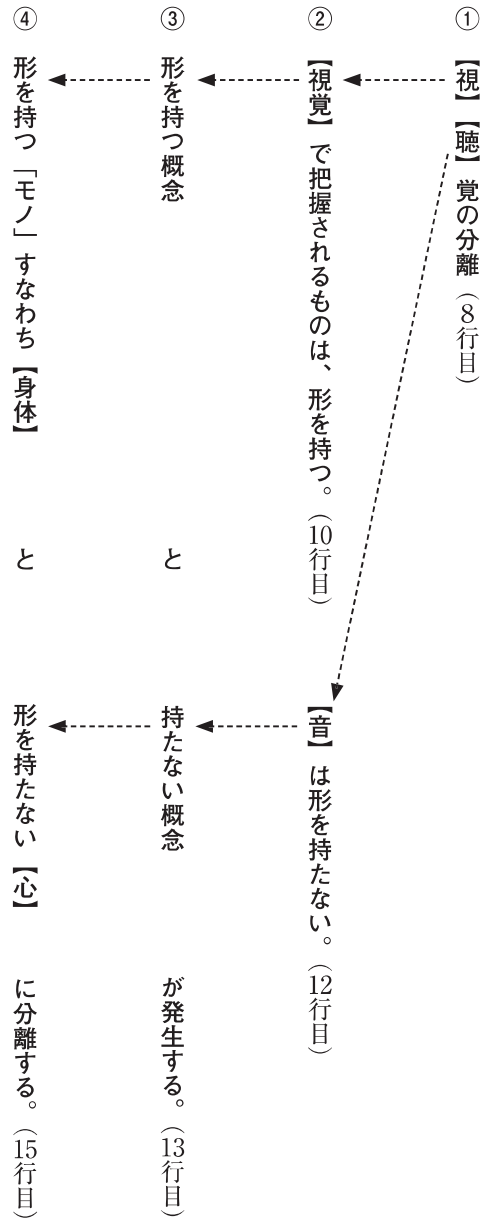
問1 3 問2 3 問3 4

問4 [X] ≡ 1 [Y] ≡ 4

問5 2 問6 2

問7 1 問8 5

問1 傍線部(a)がある8行目以降の流れを追っていきこう。



以上のことから、④「心身二元論」は①「視聴覚の分離」に起因していることが分かる。よって答は3。3の選択肢中にある「相反する」についても、本文9行目の「この二つの感覚を、対立するものの代表として、間違いないであろう」に合致する。

1Ⅱ「反応の速度」は問題とされていない。

2Ⅱ「大脳皮質そのものである言語野」が、本文7行目「大脳皮質が言語野だけでできていないことを考えても」に反する。

4Ⅱ「対立」はよいとしても「排斥」がおかしい。本文5～6行目に「視覚と聴覚に共通する部分」とある。両者には重なる部分があるということだ。

問2 哲学論の最大の特徴は「同義・類義表現の『リピート』が極めて多い」ことといえるだろう。本問についても傍線部(b)のリピートが、本文前半だけでも

- ・ 心身二元論の発生の根本原因は、われわれの脳にある。（5行目）
- ・ ヒトが形を持つ「モノ」すなわち身体と、形を持たない心に分離する。これは、ヒトが脳を使うかぎり、当然のことではないのか。（15～16行目）

- ・ 心身の分離は、対象の責任ではない。観察者の責任である。（17行目。傍線部b）
- ・ それが身体という「形」になったり、「心」という「はたらき」になったりするのは、こちらがそういう「見方」をするからなのである。（25～26行目）

以上から、心身二元論の発生の原因は「われわれの脳」「観察者の見方」ということになる。そして「われわれの脳」は、二つの感覚系「視覚」と「聴覚」に代表される（本文5行目参照）。従って答は3。

1 心身分離の原因は二つの「感覚系」なのであって、「理性」ではない。

2 主體的に統御にあたる記述が本文中にない。

4 「優劣関係」は本文3行目に出てくるが、ここで論じられている内容ではない。

問3 問2で見たように、

- ・ 心身の分離は観察者の責任である。（対象の責任ではない）
と考える筆者に対し、

- ・ 心身の分離は「ヒトという対象」の性質だ。

と、一般的には考えられやすい。これを筆者は「誤解」と言っている。

筆者の見解については、さらに本文18～19行目に述べられている。

ヒトという存在

↓ 視覚系とこれに由来する脳の部分を中心に認識すれば

↓ 身体になり、

聴覚運動系と、これに由来する脳の、視覚系とは違った部分を主体に認識すれば ↓ 心になる。

つまり、あくまで「観察者のものの見方」が心身を分離するのであって、「ヒトという存在」自体は一つであるということだ。

だから筆者は「その意味では、私は心身一元論である」と言う（本文17行目）。

それに対して、「ヒトという対象」そのものに、「身体という形のある対象」と「心という形のない対象」の二つがあると見なし
ているのが「一般的な誤解」ということになる。よって答は4。

1 Ⅱ 「一般的な誤解」の方が「常識」と言うべきものであるから、「常識を否定すること」がおかしい。また、筆者も「心とい
うものは形がないとしか体は形がある」ということ自体は否定していない。

2 Ⅱ これはむしろ筆者側の考えである。

3 Ⅱ 「初めて知る」がおかしい。

問4 「X」

空欄Xの直前に、「手でつかんだものと、足でつかんだものは、別物である。」とある。これは言うまでもなく、認識の違いを対
象そのものの属性と見なしている「一般的な誤解」のことを言っている。よって空欄Xに「巧緻」「崇高」「有用」などのホメコト
バを入れることはできない。

なお、「素朴」に関しては、本文2～3行目に「多くの人は素朴な二元論を暗黙のうちに採用している」とある。

「Y」

本文30～34行目をまとめると、次のようになる。

〈キリスト教〉…真実は外の世界すなわち客体にある

⇔ 正反対の Y

〈仏教〉…内部世界を問題にする

この対立構図は、

〈一般的な見解〉…心身の分離は「人という対象」の性質だ

⇔

〈筆者の見解〉…心身の分離は「われわれのものの見方」に起因する

と対応している。ここから、二重傍線部がそれぞれの見解の依拠するベース、すなわち「前提」であることがわかるはずである。

問5

外部世界（対象）と内部世界（脳）の「対応」については、本文44行目以降に述べられている。前者を α 、後者を β として、整理してみよう。

外部世界の法則（ α ）と内部世界の法則（ β ）の関連の問題

・脳という器官（ β ）が、外界の情報（ α ）を処理するものとして進化の過程で生じた

← したがって

・脳の考える法則（ β ）が、自然法則（ α ）と対応して、少しも不思議はない。

これをふまえているのが2。

1 ≡ 「世界は神によって秩序付けられている」が不適。これは本文中に出てくる「キリスト教」的世界観であり、筆者はむしろ「仏教」の見地に依っている（本文34行目）。

3 ≡ 「並列的」では、両者が交わる点がある（「対応」する）のか判然としない。並走する二線は交わることはないのだから。

4 ≡ 「対立する」が明らかにおかしい。

問6

問6と問7は、問われていることをしっかりと区別する必要がある。というのは筆者は、

① α と β が「対応」しているケース

② β のみで成立する概念

の二つを想定しているからである。それは本文38行目「脳のなかにしか存在しない概念があることも、常識的によく知られている」とあることから分かる。そして①を保証するものとして「経験科学つまり実証科学」を挙げており、②の例として「数学」を挙げている。問6で問われているのは前者。

選択肢2は、「外界情報（ α ）を処理する脳の理解の過程（ β ）を経験則（≡経験科学的に）によって実証する」とあり、①を適切に説明している。

1 Ⅱ「外界情報の増大」「脳の発達」が、本文中にない内容である。

3 Ⅱ「自然法則の増大」が不可。

4 Ⅱこれは2の内容に近く、迷うところではあるが、「類似」が不可。「対応」していることと「偶然発生的に似ている」ことは違う。

問7 これは問6とは逆に②の「数学」に関わる問題。「数学」は「実験室で証明する」必要がない（本文52行目）、それゆえ「アナロ

ジー（類推）」でしかあり得ないと言う。選択肢はすべて「脳の機能（ β ）」について述べており、それを実証するのが、

1 「類推の形式」による

2 「視覚系の生理学」による

3 「知覚の対象を分析すること」による

4 「自然の法則を発見すること」による

としている。よって答は1。

問8 □語における「ない」は

① 形容詞の「ない」

② 打消の助動詞の「ない」

の二つ（「形式形容詞」というのもあるが、ここでは触れない）。

形容詞は自立語であるから文節のアタマに位置しうる。助動詞は付属語だから文節のアタマには来ない。

よって答は5。

3章

【問題】（演習）

出典：『建礼門院右京大夫集』／ 亜細亜大学 03年

現代語訳

重衡の三位中将が、（捕虜という）つらい身の上になって、都にしばらくの間（いる）と耳にした頃、「特にとりわけ、昔親しかった人々の中でも、（私は重衡様とは）朝夕なれ親しんで、（この重衡様は）おもしろいことも言い、またちよつとしたことでも、他人に対して、都合のよいように気遣いなどをして、めったにいないような良い方だったのに、どのような（前世の）報いで（こんな身の上になつてしまったのか）」とつらく思われる。（その姿を）見た人が、「お顔は以前のまま変わらず、目も当てられない（さまになつておられた）」などと言うのがつらく、悲しさは言いようがないほどだ。

朝夕に……朝夕慣れ親しんで過ごしていたその昔はこんなことになろうとは思つてもみなかった

返す返すも（重衡の三位中将の）心中が自然と推し量られて、

まだ死なぬ……（死んで来世で身の上を変えるのはやむを得ないが）まだ死んでいないこの世にいるうちに（捕虜というところでもない）身に（姿を）変えて、どんな気持ちで明け暮れ過ごしているのだろうか

また、「維盛の三位中将が、熊野で身投げして（亡くなったそうだ）」と言って、人が口にして気の毒がった。（平家の公達の）どの方も、今の時代（の人々）を見聞きするにつけても、本当に優れていたなどと思ひ出されてくる方々だけれど、（その中でも維盛の中将は）際立ってめつたにないほど優れていた容貌や心遣いが、過去現在を（通じて）見て、ほかに例のなかったことだよ。だから、折々には、褒めない人がいただろうか（いやみんな褒め称えた）。法住寺殿（『後白河法皇の御所』の御祝賀に、「青海波」を舞った時などは、「光源氏（が）すばらしい青海波を舞ったという『源氏物語』の例も自然と思ひ出されることよ」などと、（人々が）言ったものだ。「花のほんのりとした美しい色つやも全く圧倒されてしまいそうだ」などと、聞こえてきたことだよ。その（美しい維盛の中

将の) 面影(を忘れられないの) はもちろんのことで、慣れ親しんできた感慨は、どの人も(同じで忘れがたい)とは言うものの、やはり(すばらしかったこの方については) 特別に感じられる。(維盛の中将は)「(私を資盛と) 同じように思いなさい」と、折々におっしゃったけれども、「そのように(思っております)」と答えたところ、「しかし、(本当に) そうだろうか」とおっしゃったことなど、数々(思い出されて) 悲しいとも言いがたい。

春の花の……春の花の美しさになぞらえていた(維盛の中将の) 面影が、むなしい波の下に朽ち果ててしまったことよ
かなしくも……悲しいことにこんなつらい目を見て熊野灘の波に身を沈めたことだなあ

解答

問 1 4

問 2 (c) 1

(d) 2

(e) 2

問 3 ア 4

イ 1

ウ 2

問 4 5

問 5 ① 9

② 6

③ 3

④ 17

⑤ 18

出典：『建礼門院右京大夫集』／ 東洋大学 98年

現代語訳

翌年の春、(壇ノ浦の合戦で安徳天皇はじめ平家の人々が入水し、自分が思いを寄せていた平資盛さまが) 本当にこの世のほか(の、あの世の人になった)と(聞きたくもなかったことを)とうとう聞いてしまった。その(資盛さまが死んだという悲報の届いた)ころのことは、(それまでのつらさにくらべても)まして、何と言ったらよいだろうか(言葉にはできないほどの悲しみだった)。(このような結果になるということは)みな前々から覚悟していたことではあるが、(現実にはその知らせを聞いてみると)ひたすらつい茫然としてしまうばかりだ。あまり(のこと)にせきとめかねて流す涙も、一方では(側で)見る人にも(すこしは)隠さなければならぬような気がするので、どうしたのかと人も思っているのであるが、気分が悪いと(言っ)て、(一日中、衾(＝掛布団)として使う着物)を頭から)すっぽりとかぶって寝て暮らしてばかり(いて)、(悲しみの)思いにまかせて泣き過ぐす。どうにかしてその(資盛さまが死んだ)ことを忘れようと思うけれど、(かえって)生憎にも(資盛さまの在りし日の)面影は我が身から離れず、(かつて聞いた)一言一言を(耳に)聞くような気がして、(我が)身をさいなむ悲しさは、残りなくすべてを言い表せるすべもない。ただ単に、「(あらかじめ)定まっている宿命として(自然と寿命が来て)亡く(なった)」などと聞いた場合でさえ、悲しいことだと(世間では)言ったり思ったりするけれども、この(ような非業の死の)場合は何を類例にしたらいいのであろうかと、(他に比べようのないほどの悲しさを)繰り返し繰り返し思わずにはいられなくて、

なべて世の……一般に世の中の死ということを悲しいと(いうの)は、このような夢(としか思われないつらい目)にあったことのない人が言ったことだろうか

時がたって(ある)人の所から、「それにしてもこの哀切きまわまることを、どれほど(あなたは悲しんでいらっしやることでしょう)か」と言ってきたので、(まるつきり社交辞令のような)並ひととおりの挨拶のように感じられて、

かなしとも……言葉にできないほどつらいとも、また胸にこたえらるとも、世間の並(の表現)で言い表すことができるのであればまだよいのですが、(そんな程度の悲しみではあるはずがないことです)

こうして（深い悲しみに、後を追って自分も死にたいと思って）いても、現実には（愛する人を失った後も宿命によって）生き続ける（このつらい）世の通例が（自分もそうかと思うと）情けなく、明けたり暮れたりし（て日を送つ）ているうちに、それでも正気も少し戻ってきて、様々なことをあれこれと思い続けるにつれて、（冷静に自分を見つめる分だけ却って）悲しさもやはりいよいよ強まる気がする。頼りなくしみじみといじらしかった男女の仲の様子も、私一人（だけ）のことではない。同じ（平家の）一族の人々に縁があつ（て契つてはかない目にあつ）た人は、知っている（人）も知らない（人）もやはり大勢にはなるのだが（「大勢いるのだが」、自分のことになると比べるものがないと思われるばかりだ。昔も今も、（老衰などの）普通に穏やかな宿命による（死の）別れはよくあることだけれど、このようにつらいことはいつあつただろうか（これほどに悲しい別れはこれまでになかったことだろう）とばかり思うのもそれはそれとして、ただあれこれと、やはり心になじんでいた（資盛さまの）ことばかりの忘れにくさは、なんとかどうにかしても忘れようと思つてばかりいるのに、（それが）できない（ことが）、悲しくて、

ためしなき……（世間に）他に比べるものもないこのような（悲しい死の）別れをして（おきながら）、それでもやはり（この世に）とどまる（愛しいあの人）の面影が（私の）身に寄り添うばかりで（あの人のことを忘れられないのが）つらく思われる
いかで今は……どうにかして今は（悲しんでも）無駄である（あの人死んだ）ことを悲しまずに、何もかも忘れてしまう気持ちでいたいものなのに

忘れむと……忘れようと思つてもまた（すぐに）思い返して、（悲しみのもととなる、あの人思い出が）跡形もなくなるようなことは（、それもやはり）悲しいことだ（とも思つてしまうのだ）。

解答

問1 ア 8

イ 6

ウ 9

エ 1

問2 3

問3 A 4

E 2

問4 B 〓 4 H 〓 2 I 〓 5 J 〓 5 L 〓 2

問5 (a) 〓 (2) (b) 〓 (5) (c) 〓 (4)

問6 10 問7 3 問8 13

問9 4 問10 1・6 問11 6

解説

問1 ア まず、空欄直前「忘れ」が《下二段活用動詞の未然形》または《同・連用形》の形なので、空欄は《未然形接続》か《連用形接続》の語で始まる必要がある。さらに、空欄は下に《引用》の助詞「と」を伴うので文末扱いとなり、空欄を含む節の中の空欄より前に《疑問副詞》「いかで」があるので、空欄は係り結びによって連体形となっているはずである。(係り結びは係助詞だけでなく疑問の連用修飾語によっても起こることに注意。) この条件に合致するのは1「ける」と8「む」である。ここからは文脈把握の問題となるが、このとき注意するのが、「いかで」の用法である。一般に、疑問副詞には《疑問》・《反語》・《詠嘆》の用法があるが、「いかで」および「いかでか」については、上記に加えて《願望》の用法もある。空欄前後では、「ものを忘れ」ることすなわち「なにもかも忘れてしまう」ことを話題にしている。「ける」では「どのようにして私はすべてを忘れてしまったのだろうか」となるが、このあとも作者は苦しみ続けるのだからこれでは意味が通らない。「む」を使って「どうにかして忘れよう」とすべきだ。

イ まず、空欄直前「思」が《ハ行四段活用動詞の語幹》なので、空欄は《ハ行四段活用動詞の活用語尾》からはじまるはずだ。これに合致するのは2「ふ」・3「へり」・6「へ」の三つ。さらに、空欄を含む節の中の空欄より前に係助詞「こそ」があるので、空欄は《已然形活用語尾》であることになって、正解は「へ」。「こそ」已然形で文が終始しない場合は《逆接強調》の用法となるが、この点からも文脈に合致している。なお、空欄の後に読点「、」があるので《終止形》がはいることはないと考えた諸君があるかもしれないが、それはそうとも言えない。本来古文には句読点はなく、出題者などの解釈によって補われた形で出題されて

いる。その際に、終止形の言い切りの形でも、いったん止める形にしておきながら意識の流れはなお続いていくような場合は、句点「。」を打たないことがある。

ウ まず、空欄の直前が《係助詞》なので、空欄は文節の頭となって《自立語》で始まる必要がある。さらに、空欄のあとの読点からそこで意味がいったん切れることがわかるので、係助詞「こそ」との係り結びによって空欄の最後は《已然形》である必要がある。この両方を満たすのは、《ラ行変格活用動詞已然形》の9「あれ」のみ。

エ まず、空欄の直前が《ラ行変格活用動詞の連用形》なので（ラ変動詞終止形には助動詞は接続しない）、空欄は《連用形接続》の語である必要がある。さらに、空欄は下に《引用》の助詞「と」を伴うので文末扱いとなり、空欄を含む節の中の空欄より前に《係助詞》「かは」があるので、空欄は連体形で終わっているはずである。以上を満たすのは1「ける」のみ。

なお、選択肢3「へり」は、《ハ行四段活用動詞の已然形活用語尾》+《存続の助動詞「り」》の形になっている。問題文に「語を選べ」とあるので、これは二語にまたがって不適切だと考えることもできそうだ。しかし、大学入試においては「語」という言葉がつねに「単語」を示すとは限らないので、これもきちんと正解となる可能性を考えておくのは大切なことだ。

問2

設問文に言う「通常の語法としては安定しない」というのは何のことか。一般に、形容詞の《本活用連用形》のあとに《係助詞》がくると、そのあとには《あり》系の補助動詞（《あり》・《はべり》・《さぶらふ》・《おはす》・《おはします》など）がくることが多い。たとえば、「うつくし」を係り結びで強調するときに「うつくしくぞある」・「うつくしくなむはべる」といった具合である。

またこれとは別に、形容詞「多し」については、活用的特色があることにも注意しておこう。一般に、形容詞の活用は「○・く・し・き・けれ・○」の《本活用》と「から・かり・○・かる・○・かれ」の《補助活用》とで構成され、《補助活用》列は主として助動詞を接続するために用いる。しかし「多し」に関しては《補助活用》列が《本活用》的に用いられることが普通で、そのため終止形「多かり」や已然形「多かれ」が存在してこちらの方がよく用いられるという特色がある。そしてこの「多かり」は、「多くあり」の熟合したものと考えられるものである。

なお、活用の仕方が通常とは異なる形容詞としては、もうひとつ「同じ」がある。これは、《本活用》列の《終止形》と《連体形》が同形となる点が他の形容詞とは異なっている。設問で「活用の仕方が普通でない形容詞を問題文中から抜き出せ」などとあ

れば「『多かり』か『同じ』を探せ」と言っているようなものだ。二語とも古語辞典を引いて確認しておくとうい。

問3 A 「またの」は通常「他の・別の」の意味だが、時間単位に関係する名詞（年・月・日など）と連語になると「次の・翌・明くる」といった意味になる。

E 形容動詞「あやにくなり」は漢字では「生憎なり」と表記され、これでわかるように現代語の「あいにくだ」の直接の祖先である。「自分の期待とはうらはらに悪い結果がもたらされたときの落胆・困惑の心情」のように理解しておくとうい。

問4 B 《係助詞》「や・か」はどちらも《疑問》・《反語》の両方を表しうるが、これが「やは・かは」となると普通は《反語》の用法となる。「なにとかはいはむ」は「なにとはいはむ」の反語だから、「言ふ」の否定文となるはずだ。選択肢1・2は肯定文的願望表現となつて不適。3は疑問文型中に準体助詞「の」がはいるとふつうは《疑問》の意に固定される（Ⅱ《反語》文には聞こえにくい）ので不適。5は疑問語の訳に相当する部分が「どうしたら」となっており、これは「いかに」などの語で示されるべきことだから不適。

H 《助動詞》「つ・ぬ」が類義・対義語に続けて重ねて用いられている場合、これは《完了》や《確述》でなく《並列》の用法となる。現代語の「たり」（たとえば類義「踏んだり蹴ったり」・対義「行ったり来たり」など）に相当する。

I 原文の「契り」の訳語に相当する選択肢末尾だけで、1・3の「年月」は排除できる。また「あはれなり」は「しみじみと胸を打つような心情一般」を言うのだから、4の「つまらなかつた」も遠い。残る2・5については、続く傍線部J「おなじゆかりの夢見る人」以下と連動させて考える。あとで見るようにこれは「平家の君達と恋仲だった女性たち」のことを言うので、5が正解となる。

J 「ゆかり」は「血縁・姻戚関係によるつながり（のある人）」の意味だから、これで1を排除する。また、続く「さしあたり」が古文では「自分のこととして現実化すると」の意味で用いられることに鑑みれば、傍線部の「同じ」は「自分と同じように」の意味を持つことになる。作者は平資盛と恋仲にあったが、平家一門の滅亡のために恋人を失った身の上である。これで3・4のような肯定的な内容の選択肢を捨てる。また2では被修飾語が「あの人」となっており、特定の人物を問題にしていることになるが、それでは傍線部K「多くこそなれど」に結びつかない。よって正解は5。

㊦ 《疑問副詞》「いかで」の用法上の注意点は、問1アで見たとおり。この語はもともと「いかにて」の熟合したものであるから、「如何^{いか}」の意味合いから考えると（《原因・理由》に対する疑問ではなく）《方法・手段・様態》に対する疑問が根柢にある。したがって「なぜ」としている選択肢1・3が消える。残る選択肢の違いは2《願望》・4《反語》・5《疑問》という意識の違いとなる。これは文脈で確認するしかない。これについては、傍線部に続いて「〜とのみ思へど、かなはぬ（コトガ）、悲しくて」とあるので、傍線部は「期待」を込めた表現だと考えて、2《願望》を採る。

問5 和歌の解釈においては、次の三点を大切にするとよい。すなわち、

- 1 まず《詞書》（＝和歌に至る地の文）の内容から、和歌に込められた感情を推定する。
- 2 次に《句切れ》（＝文法的には述語にあたる）の部分で和歌の中心と見て、構文にしたがって解釈する。
- 3 その際に、《修辭》（とくに《掛詞》に注意）が使われていないか確認する。

右の1について先に見ておこう。(1)の歌では、直前に「これは、なにをかためしにせむと、かへすがへすおぼえて」とあり、指示語「これ」の指示対象を考えると、「恋人を戦で失った、他に比べようもない悲しみ」程度となる。(2)では、直前に「人のもとより、さてもこのあはれ、いかばかりかといひたれば、なべてのことのやうにおぼえて」とあるので、「他者の慰めが等閑なものに感じられる心境」程度。(3)から(5)までは共通で、直前に「いかでいかで今は忘れむとのみ思へど、かなはぬ、かなしくて」とあるので、「恋人を失った悲しみを忘れてしまいたい忘れられようもない辛さ」程度となろう。

また右の2については、それぞれの歌の《句切れ》＝《述語》を中心に抜き出すと、

- (1) かかる夢みぬ人やいひけむ……こんな目にあわない人が言つたのだろうか
 - (2) 世のつねにいふべきことにあらばこそあらめ……並一通りに言えることならよいのだが
 - (3) 身にそふぞ憂き……我が身から離れないのが辛い
 - (4) 物忘れする心にもがな……何もかも忘れてしまえるといいのに
 - (5) 名残りなからむことぞかなしき……跡形もなく消えるのは悲しい
- などとなる。これらを念頭に置いて考えよう。

- (a) 設問に「怒りにも似た感情」とあるが、右に見たように、「悲しみ・辛さ」が直接の表現内容となっていないのは(2)だけで

ある。《述語》にふくまれる「あらばこそあらめ」の係り結びは《逆接》のニュアンスを含んだ《適當》「～すればよいが・～ならばよいが」の表現で、《詞書き》と《述語》をあわせて考えると、実^{じつ}のない慰めにやり場のないつらさを八つ当たりして皮肉を言っているような調子である。

(b) 設問の「矛盾を含んだ複雑な心情」に鑑みて、和歌の《述語》部分に表された感情と相反する内容を含む歌を探せばよい。
(5)の歌の「忘れむと思ひても」がそれにあたり、《述語》部分との橋渡しの「またたちかへり」が「反対に」のニュアンスを担っている。

(c) (1) Ⅱ「や……けむ」、(2) Ⅱ「こそ……め」、(3) Ⅱ「ぞ・憂き」、(5) Ⅱ「ぞ・かなしき」がそれぞれ《係り結び》になっている。よって(4)を採る。

問6 問題となった「ほれほれと」は、漢字では「惚れ惚れと」と表記され、「恍惚」状態をいう。現代語では「讚嘆」のような肯定的なニュアンスを含んでうっとりしている様子を言うが、もともとは「放心」などのほんやりした状態を言った。現代語にも「老いぼれ」の「ほれ」に残っている。これと「対照的な意味で用いられている」というのだから、「意識がはつきりしている状態」を示す語を探すことになり、またとくに設問文で「名詞」と指定されているのも大きなヒントになる。ここでは10行目の「うつし心」がそれで、漢字では「現し心」と書き、「現実的で冷静な意識」を意味する。「夢」の対義語の「現^{うつ}」を知っていれば容易に正解にたどりつけただろう。

問7 傍線部が《已然形＋「ば」》で《順接確定条件》の形になっており、《原因理由》を示していると考えられるので、その結果としても適切なものを選ぶことになる。

ここで注意すべきことが一つある。形容詞「つつまし」は動詞「つつむ」と派生関係にある語で、「なにかを包み隠したいような気持ち」を言い、現代語の「慎ましい」とは微妙にニュアンスを異にするということだ。(右の意味が「気が引けて遠慮がちに感じる気持ち」を経て現代語の「遠慮深い様子」に移ったと考えるとわかりやすいだろう。)

さて、傍線部自体の意味は、逐語訳的には「(私の様子を) 見る人も遠慮がちなので」などとしてしまいがちだが、実はそうではない。傍線部の直後に「なにか人も思ふらめど」とあり、他者を主語とした表現はこの部分であって、「他者から自分への詮

索の視線」が表現されている。これは傍線部の「包み隠したい気持ち」とは反対の心理状態の現れだから、前の段落で確認したことに合わせると、傍線部は「私を見る人の目も気になったから」といった意味で自分自身の心情を表現した言葉だということになる。「あまりの悲嘆を他人に見せたくない」といった心情が《原因理由》なのだから、その《帰結》となる行為としては、3「寝具を」引きかぶって（一日中）寝て暮らす」を選ぶのが妥当である。

問8 設問に「ほぼ同じ意味」とあるので、まずは傍線部に含まれる語と同じ語として「限り」・「命」・「はかなく」などを含む表現を

拾ってゆくという手が考えられるが、これだけではやはり漠然としすぎている。なんらかのもう少し明確な目当てを得られないだろうか。

「かぎりある命」とは「限界のある寿命」の意味だが、古人が寿命・生命を話題にするときは、その発想の根本に「仏道」があることを忘れてはならない。仏道の教えに依れば、「寿命には限界がある」というのは、「人の一生はもともと定まっている」といった意味合いを含むことになり、したがって「かぎりある命にてはかなく（なる）」というのは、「生まれる前から定まっていた宿命によって死を迎える」という意味になる。ここで、この文中で作者の意識の対象の中心にあるのは「恋人・平資盛の、平家一門の滅亡に殉じた死」である。これも宿命といえそうなのだろうが、平家の嫡流として栄華を極めていた恋人が合戦によって命を落としたと聞いたときの作者には、これを宿命と割り切って受け入れることはできなかった。つまり、資盛の死は作者にとってはまさに「非業の死」と感ぜられたわけだ。したがって、「生まれる前から定まっていた宿命によって死を迎える」というのは、「非業の死」とは対照的な「宿命からすれば順当な死」だということになる。このことも考えに入れながらその同義表現を探すことが、目当てとなるだろう。すると、これに相当するのが13行目の「のどかなる限りある別れ」である。「限り」の語も傍線部と共通することを、確認材料とすることができる。

問9 問1イで見たとおり、傍線部の前は逆接表現となっているので、傍線部の指示語は直前ではなく、そのもうひとつ前に述べられた

ことを指すと考えるべきだ。すなわち、傍線部の前の逆接される部分は「ただかぎりある命にていひ思へ」でひとまとまりになっているので、その前の「あやにくに面影は身にそひ、言の葉ごとに聞く心ちして、身をせめてかなしきこと、いひ尽すべきかなし」を指すものと考ええる。これは、端的に言えば「恋人・平資盛の死」を意味する。

1 「聞きしこと」(5行目)は、傍線部直前の逆接部に含まれるので、指示対象ではない。2 「なべてのこと」(8行目)は、「世間一般にありがちなこと」だから不適。3 「いふべきこと」(9行目)も、直前に「世のつねに」とあって2と同様に不適。4 「かく憂きこと」(13行目)は、「世間一般の死ならまだしも、こんなに辛いことはない」という表現の展開のパターンが傍線部の前後と共通する。5 「思ひなれにしこと」(14行目)は「資盛との思い出」の意味で紛らわしいが、これは資盛の生前のことだから、悲報に接した悲しみとは別物である。

問10

1 文章全体が「悲嘆」に満ちており、これまでも見てきたように、文章中に何カ所もだれかの死の報せに接したための悲嘆であることが述べられている。ただし、これは「恋人」に限ったことではなく、「大切な人」ならだれでもよさそうでもある。これが「恋人を失ってしまった」ことに由来するものであると積極的に判断する材料は、実は文学史の知識による。大学入試においては、『建礼門院右京大夫集』がそうした作品であることは古典文学史上の常識である。

2 「親」が不適。右に述べたように、問題文中には「親」と「恋人」のどちらなのかが判断できる部分はない。文学史の知識による判断が要求されている。

3 「やりとり」が不適。問題文中には贈答歌は見られない。

4 「深さ」が不適。むしろ、世間の人からの同情心については8行目に「なべてのことのやうにおぼえて」とある。

5 「物語」が不適。題名からもわかるように、この作品は「私家集」なのだが、その《詞書き》が大変に詳しいので、実質的には「日記」として読まれている。

6 右に見たとおりで、この選択肢が5と対比すべき内容になり、妥当である。

問11

『建礼門院右京大夫集』の作者は、「建礼門院」平徳子(清盛の娘・高倉天皇中宮・安德天皇の生母)に仕えて「右京大夫」と呼ばれた女房で、歌人としての才能を高く評価されていた。作者自身は藤原氏だが、当時全盛を誇った平家の出身である中宮に女房として仕えたために、平家の公達と交際するうちに、清盛の孫・資盛と恋に落ち、資盛の死によって悲しみを極めた後、出家を考えたが状況が許さず、後鳥羽上皇の時代まで宮廷に仕えた。……といったことがわかるのも、この作品が私家集でありながら事実上の日記文学だからである。問10の選択肢1・5の解説も参照のこと。

右のことから、選択肢としては6「平家物語」と7「新古今和歌集」との妥当性を比較することになる。6は平家一門の栄華と滅亡に焦点をあてた作品で、まさに作者の人生と重なる。7にも作者の歌は採られているが、それはあくまでも当時を代表する歌人たちのひとりとしてのことである。「建礼門院右京大夫集」の内容ともっとも関係の深いもの」と言われれば、『平家物語』を採らざるをえない。

4章

【問題】（演習）

出典：藤原長綱『京極中納言相語』／早稲田大学・一部改 90年

現代語訳

和歌は、ただ初句の五文字より結句の七文字まで、心に感じたままをすらすらと詠んだものが優れているのである。寂蓮法師の歌に、
尾上より……山の峰から門前の田に吹き通う秋風に運ばれて、妻を呼ぶ雄鹿の声が稲葉を渡って聞こえてくることだ

（という歌があるが、作者には）とりわけ自讃の様子があつて、『千載集』が選ばれた時、ぜひ入集してほしいと申したところ、撰者（である、父藤原俊成）は、「技巧的に上手で『面白い』歌である。この歌は道理の通らない歌ではないが、後世の歌を誤らせるであろう歌である。入集することはできない」と申されたが、作者は、「そのままこの和歌一首を入集させたとしても、何の不都合がありません（、何の不都合もありますまい）」ということをし、泣き泣き申したので、自分（「語り手の藤原定家」）の推薦権により入集してしまった。ところが、この頃「海辺の鹿」という題で、「松の枝もるさを鹿の声（「松の枝の間からもれ聞こえてくる雄鹿の鳴き声」）とございましたのは、「尾の上より」の歌と同じ趣でございました。（その歌で）「月だにつらき浦風に」と詠んでいる浦風だけは海辺の様子でございしますが、それ以外には（歌題の）「海辺」の心は歌われていない。また「松の枝もる」などございます下の句も、鹿の声がどのようにして松の枝を通して聞こえてくるのか、納得できない。その昔、藤原家隆の歌に、

時雨ふる……時雨が降る時分になると、雄鹿の体の表面の毛の白い斑点も（冬毛に変わるために、）色つやがなくなりはじめるとだなあ

とあつたのを、作者（「家隆」）は、上手に詠んだとお思ひになつていたが、入道（「俊成」）は、「この歌も理屈は通っている。（しかし、）冬毛に変わる頃に鹿の上毛の斑点がぼんやりして、という点は、技巧的であり『面白い』。」と言って、優れた歌であるとはなさなかった。であるから、歌はいかにも技巧的な面白さをねらうべきではないと私は思っております。一方では、歌を誤らせると申し